
Sな彼女とMな僕

城島剣騎

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

Sな彼女とMな僕

【Nコード】

N9275Z

【作者名】

城島剣騎

【あらすじ】

最強の不良を自他ともに認める主人公が、幼馴染のSな女である、神崎まりあによって徐々に追いつめられ最後には主従の関係を結んでしまうという、学園恋愛もの。

<序章> (前書き)

書き始めなので、大目に見てくださいと有り難いです。(汗)

< 序章 >

狂犬…。

それが俺に名付けられた、徒名だ。

俺は川崎 優弥。

ここ、長尾あたりではちったあ名の知れた不良というやつだ。

長尾高の狂犬と呼ばれてからは誰も俺を恐れて近づくものすらない。

しかしなあ…。

最近は柔弱な男が増えてきた為か、なんとも物足りねえ…。
どいつもこいつも俺と視線があうだけで俯きやがる。

まったく根性のねえ。

こんな事じゃあ自慢の喧嘩芸も腐っちまうぜ。

今や、こんな俺に正面張って逆らうやつあ…。

あの女しかない！

あの女だけは…、忌々しい。

女の分際で糞生意気な奴だぜ。

幼なじみじゃなかったら、麻薬を調達して売りでもやらせるんだが
なあ…。

何・故・か！

あの女だけは苦手だぜえ…。

しっかしなんでかなあ？

なんで長尾一の不良と呼ばれる俺がよお、あんな女に勝てねえんだ
か。

はあ。

つてか、またかよ。

俺が校門を通る度に、遠巻きに女達が騒いでいやがる。
はつきり言っつてうぜえ。

別に自慢じゃねえが、俺はいつも女から騒がれて迷惑してんだ。

「あつ、川崎君よおーっ！」

ああ俺だよ。

「私、最初は優弥君って女性かと思っちゃった。」
喧嘩売ってんのか。

「格好良いよねえ、凄く可愛いっ！」

格好良いか可愛いか、どっちなんだよ。

つつつか、男に可愛いとか言っつなよキメえ！

ああっ、全くうぜえ。

「うぜえぞてめえら。」

俺が一番嫌いなのは、この女みてえな顔立ちなんだよ。

ああ！？

やらせてくれんのかあ？

なら金くれよ。

ないなら売りやれ、売り！」

俺の怒声どせいを聞いた女達は、一瞬で静寂せいじやくの虜とりとなった。

長年こんな顔してんだ、女を黙らせるすべぐらいは心得ている。

「最つつ低。」

ああ、最低上等よ。

「あんなに可愛いのに、性格は最悪よねえ。」
けっ、最悪結構なこった。

なんとも言え。

俺のこんな顔で、 どんだけ苦勞したか知らねえだろてめえらは！
ガキの時は怖い思いをしたのは一度や二度じゃねえ…。

シヨタ好きの変態女に拉致られかけたり、幼女と間違われてストーカーされたり…。

もう沢山だぜ。

やっと男らしく自信もって生きていけるようになったんだかな、

今更性格なんざ変えられるかよ。
って立ち去ろうとしてると、嫌な寒気を背後に感じた。

「ちよっと待ちなさいよ」

出た、出やがった。
全く。

ただでさえ朝から機嫌悪いのに、朝から一番会いたくない女あ。
俺は兎に角この女とはかかわりたくなかったので、足早に立ち去ろうとしたんだが…。

「優弥あ、待ちなさいって言ってるのよ？」

私の言う事が聞けないっていうの？

まさかね、そんなはずないわよね？

ゆ・う・ちゃん。」

ああ、くっそお。

だから嫌なんだよこの女だけわあ。

幼なじみだった頃からのいっちなばん呼ばれたくない呼び名は使う！

それにこの自信に満ちた言い方！

この女、神崎まりあこそ、目下一番うぜえ存在だ。

「ああ！？

あんだよ、学年が一つ上だからって調子こいてんじゃねえぞゴラあ。
てめえなんざな。

幼なじみじゃなかったら、とっくに売りやらせてカタに嵌^はめてやる
のによ。」

するとこの女、まるで小馬鹿にしたように手招きしやがった。

「いらっしやい、この娘達に浴びせた暴言を取り消しなさい。

あたしに売りやらせる？

フフツ、君にそんな事出来んの？」

ああっ、ムカつくムカつく！

「せえよ、バカ。」

俺は逃げるように学校に入ると、屋上の定位置で煙草たばこをふかしはじめた。

< 序章 2 >

「つたく、たりいな。ふけるか……。」

正直、学校が面白いなど感じた事もないし、勉強なんざ糞くらえだ。

と言いながらも親父が亡くなってから、すっかり元気を無くしたおふくろの為にも出席日数だけは稼いでおかなきゃならなかった。

これでも親にだけは、これ以上は苦労かけたくなかったし、ましてや兄貴のように本職になる気もなかった。

「だあくれだ！」
うぜえ。

俺にこんな舐めた事しやがる女は、まりあしかいねえ。

「うぜえよ！」
つたく、ベタな真似しやがって。」

俺は試しに、これ以上ないくらいに眉をしかめて睨みつけた。

「あら、かぁーわいつ！」
はぁぁ……。

誰かこの女を始末してくれ。

「おいまりあ。
てめえ……、マジに犯すぞ！」

お？

流石にこの殺し文句が効いたのか、意外にもまりあは沈黙した。

……。
……。

つたくう。

なんなんだよ、この静寂さは。

「今からふけるからよ、どけ。」

と屋上の扉のノブに手を握ると、俺は後ろからまりあにガツチリ手を掴まれた。

「ああ!？」

邪魔すんじゃないよ、バカ!

俺は必死でまりあの拘束「こくそく」から逃れるとともに、捨て台詞を吐いた。が、次の瞬間。

まりあの瞳が一瞬キュピーンと光ったように見え、俺は驚愕「きょうがく」を覚えた。

「ふふ、うふふつ、うふふふふつ。」

げっ、不意にすげー不気味に笑いやがった。

「あんだよ、気味悪いな!」

いや、実際寒気すら覚えていた。

「犯す?」

誰を?...私を?」

ヤベえ、なんかヤベえぞ?

「せーな、もういいからどけよ。」

狼狽えんなら絡んでくんなよバカ!

ちよつと脅し文句が効きすぎたか?

と思ったが、さっきまでの捨て台詞を俺は速攻で後悔するはめになった。

「よくはないわよ、やってみせなさい?

いいから。」

はあ?

なんだこの女あ。

「犯していいって言ってるのよ?

ほら、どうしたの?」

そういうと、たじろいで後退りする俺を威嚇するよつに、前へ前へと迫ってきた。

ヤバい!

俺の心の中の、危険信号が黄色から赤に変わるのを感じた。

この女は危険だ。

こいつにこれ以上関わると、せつかく築いてきた、これまでの俺の全てが破壊される！

「いい加減、どつくぞゴラあ！」

しかしまりあは臆する事なく、

むしろ自分から服を一枚、また一枚と脱ぎ捨てながら俺との距離を縮めてくる。

くっそう…。

これでは狂犬ではなく、駄犬の遠吠えじゃないか！

俺はまりあが恐ろしくなって、たまらず逃げ出した。

「やっぱり…ね。」

あの子、偉そうに吠えているけど一度も女性と経験した事がないわ。

「

俺は校門を出た途端に叫び声をあげた。

「くっそおーっ」

糞つたれ糞つたれ糞つたれ糞つたれえ。

なんだあーっ！

なんで俺があの子を恐れなきゃなんねえーんだあーっ！

校門を出た所で俺は安心したのか、

女に負けた悔しさと恐れた不甲斐ない自分が情けなくなった。

抜け殻のような意識のないまま、知らず知らずのうちに俺は繁華街を歩いているのに気づいた。

「おい兄ちゃん、どこ見て歩いてるんじゃあ。」

はあ。

俺の気が滅入ってる時に、どこの馬鹿だ？

ちよつと肩がぶつかったぐらいですよ。

「ああ！？」

と言った次の瞬間、俺は凍りついた。

このチンピラが付けてるバツチって確か、うちの兄貴と今探めてる吉田組の代紋だいまんじゃないか。

「あ、すいません。」

情けない…。

だが弁解べんかいする訳じゃないが、

いくら長尾一ナガオの不良と呼ばれていても、所詮は高校レベルの話。

このチンピラ1人だけをカタすならともかく、代紋だいまんつけてる本職に手をかけたら

ヤバい事になるのは明白な訳で…。

「昼間っからガキがこんな所、ぶらついとるんじゃないか。」

どチンピラが！

と俺は心の中で罵ののった。

「ほう、吉田組の下っぱはガキにしか威勢いせいはれねえのか？」

まさしくその通りだ。

こういうのを溜飲しづいんが下がるって言うんだらうなあ。

「なっ、てめえ沖田組の若頭、川崎 龍一じゃねえか」

素っ頓狂すったんきやうな声でチンピラは兄貴に指をさした。

「よう、優弥。」

お前は俺と違って優等生なんだから、あんまりおふくろに心配かけんなよ？」

「あ、兄貴。」

頼れる兄貴の登場で、俺は胸を撫で下ろした。

「てんめえ、オジキを怒らせたらしいな。」

次に会ったら覚悟しとけよ？」

と、どチンピラはどチンピラらしく、捨て台詞を言って逃げ去った。

「兄貴、俺、別に優等生なんかじゃないぜ？」

実際、学校へ行っても授業はふけるし早退しまくりだし。

「学校に通ってるだけで優等生だよ、俺と違ってな！」

兄貴は俺にとつてはいつも憧れの存在だった。

いつも颯爽さつそうとして臆する事なく、常に正しいと信じたものの為に喧嘩けんかしていた。

だが、親父も学校の教師も理由も聞かず、単なる暴力と捉えて兄貴を叱しかるばかりで、キレた兄貴は家から飛び出して戻かえってこなかった。

兄貴が本職になったのを知ったのは、
学校帰りに偶然通りかかったからだ。

<夜想曲>

家に帰ってきた俺は部屋に入るなり、窓からニンマリ笑って手を振ってきたまりあを見たので、思いつきりカーテンを閉めてやった！

「あんの野郎お、いけしゃあしゃあと！」

まりあは隣の家で、俺の部屋とまりあの部屋とは窓を挟んで向き合っている。

ホームドラマやラブコメには有りがちな設定だが、正直言って迷惑千万な話だ。

俺は何度もおふくろに抗議したが、

「まりあちゃんの隣で嬉しいでしょ！」

くれぐれも言つとくけど、着替えとか覗いたりしちゃダメだよ？」

はあ？

覗くかバカ。

「おふくろー！」

するとおふくろはお日様のような伸びやかな笑顔でのたまった。

「歳を取ると日当たりの良い部屋が良いのよ。」

意味不明の理屈じりくつである。

「あの女の隣なんて、俺は嫌だよ！」

しかしおふくろはまたしても笑いながら、ぬかしやがった

「責任取る気あるなら、まりあちゃんだったら母さん何も言わない。」

「おいおい…。」

呆れてものも言えなかった。

以来、面倒くさいのでこの部屋から配置換えした事はない。

夜…

秋だというのに未だ熱帯夜のように暑かったので、窓を開けて昼間

晴らせぬ憂さをB・Zを聞きながらおやつを食べる事で晴らしていた。

「やっぱB・Zいいよなあ、サイコー！」

すると、不意に隣のまりあの部屋の窓が開いて、話しかけてきた。

「あら、新曲？」

勝手に話しかけてきたので、たちま忽ち気分を阻害された。

「せーな。」

やはり部屋の配置交換をていしょう提唱すべきだったのかもしれない。

「あら、昼間の事、まだ怒ってるの？」

昼間…。

その話を蒸し返されなくなかったので、適当に返事をした。

「別に。」

いつまでも怒ってられるかよ、ダセえ。」

俺は殊更じゆくにぶつきらぼうを決め込んでみた。

だが、まりあはつまらないとでもいいかげんな表情で不意に視線をそらせた。

「そう。」

まりあは短くそう言うと、また窓を閉めた。

「ああ気分悪い！」

俺はふて寝をかんこう敢行する事にした。

夜中、妙な重苦しさを感じ、俺は思わず目をあけた。

「こんばんわ。」

ええっ？

目をあけたらまりあの顔が目の前にあり、美しく長い黒髪が俺の鼻孔をくすぐった。

「ここ、おお、俺の部屋だよな？」

冗談だろ？

思わず俺は部屋中を見回したが、やはり間違はなくここは俺の部屋であった。

「そうよ？」

まりあは短く答えると、魅惑のwinkをしながら自慢の、その長く美しい髪をかきあげて微笑んだ。

時刻は深夜の2時…。

そうか、夢だ！

これは…。

きつと悪い夢に違いない。

もうとんでもなく最悪な悪夢とでも言うべきか。

「とりあえずさあ、例え夢の中でも俺からどいてくれない？」

こんな非現実的な経験は初めてだったので、俺は夢の中のまりあに鼓動を聞かれやしないか？

などと半ばパニックに陥りつつあった。

「あら、どうしてかしら？」

そういうとまりあは、わざと意地悪く体を擦り付けてきた。

「む、胸があ！」

くっそう、なんていう気持ちのいい…。

じゃなかった！

なんていう巨乳女なんだ。

「あら、胸がどうかしたかしら？」

おっぱいが当たってるっつーの！

ヤバイ。

いくら夢でも、こんな夢見たら明日まともにまりあの顔が見れない。

「ちよつと待て。

いくら夢の中のまりあだろうと、プライバシーの侵害しんがいっつーのがあんだろーが。」

するとなにが嬉しいのか、不気味な程美麗びれいな微笑みをうかべながら、顔を近づけてきた。

「夢ねえ、うふふふふつ。」

笑うとこか、そこ。

「じゃあ、夢の中という事で、遠慮なく優ちゃんを調教しちゃおう

かなあ。」

おわっ！

不意にいきなりギョツと抱きすくめられて、その髪から甘い匂いがかいだ俺は意識が麻痺^{まひ}してしまいそうになった。

「んーっ！」

いきなり濃厚なk i s sをしたまりあは、なんとそのまま舌を入れた。てきた。

「ちよっ…。」

待て待て待てって。

早まるなああ！」

あまりの衝撃に驚いた俺は、まりあをはねのけて部屋の隅まで退避した。

< 夜想曲 2 >

「ふふふつ、あはははは。」
くっそう、ふざけやがってえ。

俺は恐怖から怒りへと気持ちが変換された。

「やっぱり優ちゃんってば。」
な、なんだよ。

次にまりあの言葉から何が繰り出されるのか、固唾かたすを飲んだ。

「か、可愛いつつ!」

あまりにも俺の過剰な防衛反応が余程おかしかったのか、まりあの笑いはおさまらなかった。

「てえんめえ。」

俺をからかって、んな面白いのかよ?」

今度は逆に俺からまりあの方へとにじり寄っていった。

「あら、面白いわよ。」

だから?」

てめえ…。」

きっぱり言われた俺は、思わずあっけにとられて二の口が聞けなかった。

「調子くれてると、ガチで犯すぞゴラあ!」

だがまりあは何事もなかったかの如く、あっけらかんとこたえた。

「どうぞ?」

てんめえ…。」

あまりにもあっさりとした速攻でOKサインが出て、正直俺は狼狽ろっはいした。

「ちよつと、マジで勘弁しろやゴラあ!」

やっちまった…。」

よほど今の台詞がツボにはまったのか、まりあは腹を抱えた。

「わかったよ。」

まるで拗ねた子供のような物言いになってしまった。

「そう、素直ね。」

でもあたし的にはまだまだ物足りないんだけどね…。

約束だし、今夜はこれで勘弁してあげる。

あ！後、俺とか野蛮な言葉づかいはやめる事！」

ああ！？

女主人の次は母親きどりか？

やってらんねえ…。

「返事がない！」

いい？わかったあ？」

ウゼえよ！

と言いたかったが、この場を掌握しているのは間違いなくまりあだし下手な事を言うところ今度こそ…。

「わかったよお。」

俺はまたも同じ口調でこたえるしかなかった。

「それでよし！」

やっと寝れる。

もう二度とこんな夢、見てやるもんか！

と安心した俺は眠りの床へついた。

< 拉致 >

チチチチ…。

チュンチュン、チュンチュン。

朝の小鳥の囀りに続いて目覚まし時計目覚ましがまくしたてる。

ピュ！

ピュピュ！

ピュピュピュピュピュピュピュ！

「うるせえなあ」

ピ。

いつもならしつこく繰り返す目覚まし時計なのに、今日はやけにあつさり切れたな。

だが、まあいい…。

もうちょっと。

そう、あとちよい。

もうちよい寝ようつと！

すうーつ。

ん？

ちよつと待て。

俺、目覚ましきってないよな？

じゃあ誰だ？

おふくろ？

まさかな、おふくろだったら布団はぎとってエルボーくらいはぶちかますはず…。

ま、いつかあ。

「起きなさああああーい！」

なんだなんだあ？

俺は柔らかな感触と甘い匂いに、一抹の不安を覚えた。

「うわあ！

なんだなんだあ？」

余りの怒鳴り声にびっくりして目を覚ますと、隣でまりあがにんまり笑っていた。

「おはよ！」

…。

「なんだ、まりあかよお。

…。

ん？

うわあ、お前なんでここにいるんだよお！」

びっくりしたびっくりしたびっくりしたあ。

「やっとお目覚めかしら？」

この寝坊助さん！」

俺はまりあに人差し指で頬をつつかれた。

「のわああ！」

なんでまりあ、裸あ？」

ちよつと待てちよつと待てちよよよつと待てえ！

と錯乱状態さくらんの俺を見て、まりあは人差し指を頬に向けて首を傾げた。

「昨日の事、覚えてないの？」

昨日？

…。

えっ、えっ、ええっ？

「え、嘘っ！」

だって。

え？だってあれは…。」

さらに錯乱した俺をみつめ、まりあはにんまり笑って衝撃発言をさらりと言った。

「えへっ。

実は夢落ちじゃなかったり。」

ぎゃああああ。

もし夢なら、早く覚めてえ。

とじたばたしていると…。

さらに最悪な事態が！

「朝から五月蠅うるはいわよ、静かに起きなさい。」

ぐっはあ、こんな状態でおふくろを部屋にいれる訳にはいかない。

だが慌てる俺をよそに、まりあはすたすたと扉の前へと歩き出した。

「ちよっ！」

俺は慌てて制止しようとしたが、すでに手遅れか。

かくして部屋の扉は解放された…。

「…。」

ま、当然だろうな。

茫然自失ぼうぜんじしつなおふくろと裏腹に、まりあは一糸纏まとわぬその姿で、優美にも挨拶をかわした。

「あら、お母様おはようございます。」

だあれがお母様だ！

「あら、まりあちゃんおはよう。」

なんなんだ。

俺はこの二人の思考回路がどうなっているのか知りたい…、いや知りたくもない。

「つて、何を平然と挨拶してんだよ」

母はちらつとまりあを見つめ、周りを軽く見渡すと、軽くお辞儀せじぎをした。

「まりあちゃん、心配しなくても、ちゃんと責任とらせるからね！」

おふくろの俺の人権を無視した言葉に、俺は思わず殺意を覚えた。

「はあーい、責任とってもらいまあーっす！」

こらこらこら。

誰がなんの責任だつてえ？

つつか、2人して勝手な事をほざいてんじゃねえーっ！

俺は超不機嫌になりながら、まりあに手を繋がれつつ登校した。

< 拉致2 >

朝、登校する生徒たち（特に女生徒）は騒然そつぜんとなっていた。
思わず目を丸くする者。

黄色い声で絶叫する者。

なぜか、しくしくと泣きだす者。

そしてなぜか敵意に満ちた視線を俺に向ける者。

同じくまりあにその視線を浴びせかける者。

「ええっ、ちよっ嘘。」

と言う者や、口笛でピューピューと囃はしたてる者。

「嫌あ、私の川崎君うん。」

と号泣する者も。

つつつか、だあれが誰のものだつてえ？

とつつこみを入れたかったが、なんか鬼気迫るものがあつたのでや

めた。

まあ、皆が驚くのも当然の帰結きけつであつた。

長尾高一フルの不良と言われ恐れられていた俺が、まりあにガッツリ手

を掴まれて

仲良くお手々繋いで登校してきたのだから…。

昨夜の出来事以降、俺はまりあに抗えない存在になり果てた。

「まりあ、てめえもういいだろ。」

手え離せよ！

俺は無性に恥ずかしくなって、つとめてぶつきらぼくに言った。

「あら、優ちゃんは照れ屋なのね。」

うるせえよ、マジで俺のイメージが崩れるんだよ。

「いい加減、うぜえんだよてめえは！」

キューピーン！

おいおい。

今のは確実に、目が光りやがった。

だんだんまりあが化け物に見えてきた。

「従僕の契約その1。」

なんだなんだあ、その猫口はよお。

「わあっーた。

わかったからちよっ、止めるよてめえ。」

くっそおお、まるで脅迫じゃねえかあ。

俺は昨夜、従僕の契約十箇条とやらを約束させられてしまったのだつた。

「そ、わかればいいのよ。」

まりあは改めて握った手をほどき、今度は腕を組んできて歩き出した。

俺はせめてもの意地で、まりあより前に出て歩く事で、まりあをエスコートしている事をアピールせざるを得なかった。

あまりに悲しい男の意地である。

下校時刻…。

俺は従僕十箇条の契約の一つ、きちんと最後まで授業を受ける事！を守り、周りからの好奇心に満ちた目線にメンチを切りながら、この下校時刻までを乗り切った。

校門を恐る恐る校庭から監視し、まりあがいないかを確認した。

「いない、いないよな？

いない？うん。」

予定がない限り、登下校は一緒にする事！

俺は校門にまりあがいない事を確認して、胸をなで下ろした。

が！そんな甘い幻想を一撃で破って、背中ごしに胸を押し付けてくる存在に気づいた。

「うふふふふっ、待ってないと思ったあ？

ざあ・ん・ね・ん。」

居たー(・・)ー(泣)

「せえよ、別におめえ待ってた訳じゃねえよ。

勘違いすんじゃないやねえ、バカ。」

と俺はまりあの顔を窺いながら、啖呵たんかを切った。

「よし、ちゃんと授業を最後まで受けたようね。

じゃあご褒美に今夜は、ねっとり濃厚に責めてあ・げ・る。」

ちよつと待てーっ！

「てんめえ、それご褒美じゃなくておしおきだろつが。

ざけんな！」

思わずドスの効いた毒を吐いたつもりが、逆にまりあの嗜虐心しゃくしんに火をつけてしまったらしい。

「あら。」

優ちゃんはおしおきの方が好きなんだあ、やっぱり優ちゃんってば

ド なのね。」

はあ!?

マジでウゼえを通り越して辛え。

ああ、泣けてくる。

「だからあ、十箇条守ってんだろつが。

守ってる限り、勝手に手え出すんじゃないやねえよ。」

すると笑いが止まらなくなつたまりあは、隣でひたすら笑い続けた。

「おい！」

学校を後にした俺たちは、繁華街の手前の路地で不意に声をかけられて立ち止った。

「探したぜ、兄ちゃんよお！」

げっ、こいつ確か昨日のどチンピラじゃねえか。

どうも雲行きが妖しくなつたのを察したのか、不意に俺の前にまりあが立ちはだかった。

「ちよつとお、優ちゃんに何か用なの？」

さっきまで眉間にしわを寄せていたどチンピラは、まりあを見ると
忽ち下衆な視線をまりあになげかけた。

「おお、この娘って兄ちゃんの彼女かい？」

こりゃまぶいねえ。

丁度いい。

兄ちゃんより拉致るんなら、まぶい姉ちゃんのが楽しめるしなあ。」

なんだとお？

どチンピラは下品な笑みを浮かべると、まりあを軽くひよいっと肩
に担いで車に乗せようとした。

当然、こんな光景を見て無視する程、俺は冷酷ではない。

「待てやてめえ！」

勇んで俺はどチンピラに殴りかかろうとしたが、車の中にはそのど
チンピラより遙かに恐ろしい眼光を持った男がこつちを睨みつけ、
俺を金縛りにした。

「まあ、兄ちゃん。」

そう興奮せんと兄貴に泣きつけ、兄貴によ。」

どチンピラはそう言い残すと、まりあを乗せた黒い外車は猛スピード
でその場から去っていった。

< 拉致3 >

俺は、あまりにも突然の出来事に、茫然としていた。

「…。」

そうだ

兄貴だ、兄貴に頼むしかねえよ。」

俺は走った。

しやにむに疾走した。

走りながら自然とこぼれ落ちる涙に俺は動揺していた。

今まで生きてきて、こんな悔しい思いをした事がなかったのだ。

「どちくしよう！」

涙が後から後から滝のように溢れて止まらなかった。

俺は…。

まりあが好きだ。

こんなにも好きだったんだあーっ！

俺は惚れた女1人守りきれなかった自分を嫌悪しながら、ひたすら

夢中で兄貴のいる沖田組の事務所を目指して疾走した。

どれだけ走りつめただろう。

俺は、息も絶え絶えになりながら、兄貴の組事務所に到着した。

ガチャッ。

俺は殴り込みに入ったヤクザのように、組事務所を搜索しはじめた。

さすがに兄貴の顔が効いてるおかげで、組事務所内も顔パスである。

そんな俺をみとめると、一人の貫禄のあるヤクザが親しく声をかけてきた。

「おお、若頭の弟じゃないですかい、兄貴なら奥の部屋で賭け麻雀

を楽しんでるぜ？」

兄貴の舎弟、ヤスさんは気前よく兄貴のいる部屋まで案内してくれた。

「有り難う御座います、ヤスさん。」

このヤスって人、兄貴に負けず劣らずの武勇伝の持ち主で、兄貴と共に、数々の抗争を駆け抜けた名の知れたヤクザである。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n9275z/>

Sな彼女とMな僕

2011年12月30日02時45分発行